山形大学紀要（人文科学） 第十五巻 第一号

1、「江南遊草」

1、上海

江南遊草は、『海上人家』と題する七言律詩に始まる。海上、

江南遊草は、『海上人家』と題する七言律詩に始まる。海上、
前賢・後賢は欧米による近代化の波に立った当時の上海の様子を詠じたのであろう。三句目「砲丸轟音」は軍事訓練、または港に入る船船の砲声を詠んだものか。四句目「火船」は蒸気船であるが、そらく黄埔江沿いの外灘（バンド）にはひっきりなしに船船が出入していていたことであろう。このような近代的な風物を詩に詠むことは、明治に入ってあたって遊興をする風としてわが国の詞壇に迎えられた。明治八年に森春葉が撰行した『東京才人絕句』が文明開放を高らかに歌い、成島柳北の『航洋雜詩』が愛唱されたことなどがその一端を如実に物語っている。彼山詩は山の彼方の芸術の地を訪れた詩を詠むもの hinduism

そうした感が、かく文明の利潤を詠んだものである。詩としての字句の方法を考えると、第四句の「煮」という字を用いているから考えても、

『史記』に「煮」の用法は、第三句の「煮」が字の意味であるならば、彼山はこれを鍾音かす。意に用いる様である。してみるのこの句における「鍾」の用法は、些か
第五句目は、前半部分に、荒れ果てた海の景像を描き、後半部分に、海が静かに波をなして流れる様子を描く。この句は、海の変化を表し、静かさと動かさの対比を示す。

第六句目は、同じように静かな海の風景を描写する。この句は、海の平穏さを人々の心に植え付ける。
明治時代の或る文化人に至っての中国——長尾

図版② 胡公寿筆「骨筆之図」

中国を訪れた日本人、例えば安田老山、村田香谷、長尾無黙など、その中でも出雲を訪れた人物の中には、胡公寿を高く評価した者がいた。胡公寿と親交のあった張子祥には、胡公寿の書画を高く評価していた。特に胡公寿の書画の美は、それまでの中国書画の美を上回るものであった。胡公寿の書画は、其の運筆自在、神出鬼没なるを観る。奇を以て勝るものあり。張子祥の言葉に、して運筆自在なるを観る。胡公寿は「奇」であった。「奇」は、神出鬼没であると被評価する。張子祥の言葉は、胡公寿の書画の美を、運筆自在、神出鬼没という意味で評価している。その美は、胡公寿の書画の美を超越するものである。その美は、胡公寿の書画の美を、運筆自在、神出鬼没する意味で評価している。
明治時代の或る文人にとっての中国　長尾

筆者は、同じく徐灃が「天下三分必黑月、三分無難是揚州」の言葉を引用し、テーマの一部として挙げている。徐灃の揚州への思いは、その地の風景と歴史に深く関わっている。揚州は、古代から文人が集まる場所であり、「十日一覚揚州夢」の綴りはその風情を表している。揚州の風景は、水庭や花見の場所、以及其の地にゆかりを持つ文人・詩人らの活動によるものである。

さて揚州の地は、詩人の深し思い入れを持った訪問した土地であろう。揚州は、晩唐の詩人杜牧が「十年一覚揚州夢」（「遺懷巻」）で詠んだ揚州という地を訪ねたが、ここに残された跡は、往時の余香を喚起させる。詩のなかには、揚州の地を実際に訪れて、その景観を眺め、文人ゆかりの遺跡を訪ねるという描写がある。
茫茫たる天塩の裏

まるひらは、何事をなすにそれも最近の時後があり、また最大
期は暫時であって至るもののいかなかのことで消長があること
とを詠じる。そして、この茫茫たる天地の間で、最適な時後は
『礼記』中にして「三十日自、有室。四十一日、強、而仕」(曲礼上、三
条有室……四十一日)は內壇であることに基づくが、実際のところ
はと云ってある。何に言え、用達、其時易尽とするとほとんど
様の振る。

詩を水に浮かぶべき草のように揚州へとどりついた茫茫自身
の様な詠ずる。

茫茫と世の或る文人にとっての中村—長尾

うばりである。このような状況であるから採山は、どれ程あると

八利の勝も探らず
三絶の碑も尋ねず
古来探求

八利に於て是れ天涯なり

詩は一転して夢誤る

高談無逸

夢に故山に向ひて帰る

向我問喜悲哀

黙然夢魂醒

失憶夢似真

真真却化生

かに醒め、灯火は暗く点り、夜は寂しく身にしみるばかりである。
「蓬莱夢魂囲」という表現は、『左伝』に於いても、「蝴蝶の夢」として
いられている。「蓬莱夢魂囲」の句に用いられる「蓬莱」は「神し
た」を命じた。また、「蓬莱夢魂囲」をもって、従来の夢の
一種の代表とし、真実や夢を区別するものである。話は「夢が
現実を応じない」として、「蓬莱夢魂囲」の句を用いる。
古の人のみならず、今人もまた遊ぶのが難しい。峯山はいう。会いに

一人一回

已に再三迎い、難を無罪。

事態も等に参差

怒りを、心を、細に

知る、見に至る

若し、再三に

者、心を、細に

知る、見に至る

若し、再三に

者、心を、細に

知る、見に至る

若し、再三に

者、心を、細に

知る、見に至る

若し、再三に

者、心を、細に
かつて、かくのごとく落胆し、意気消沈した状態にあった拝山が、一度ならず度も訪れた場所があった。それは明末清初の人、史可法の墓であった。

史可法は清兵が揚州を攻めた折に降伏勧告に従わず、徹底戦争し、ついに討ち死にした明朝の忠臣で、後に「忠正」と讃された。この間に、清軍は揚州を占領し、その記録が王秀楚校の「揚州日記」として残っている。拝山はこうした和刻本によって史可法の名を知るところであったろうか。史可法の墓は揚州俯見村の梅花楼のふもとにある。結句に「梅花独映故臣心」と詠まれた通り、墓は梅の木が多く植えられている。拝山が史可法の墓を二度も訪れたの

明治時代の或る文人についての中国－長尾
주제，

「신체적 입생」，11

 measurable 는 본래 체계와의 관계를 오래간만에 잊어버린 정보에 대한 주제를 포함할 수 있다. 

어려운 내용을 이해하기 위해 필요한 전문적인 지식이 필요하다. 이는 신체적 입생의 핵심 개념을 포함한다.

이러한 내용은 심각한 문제로 인해 발생할 수 있다. 이러한 문제는 심리적 혹은 기능적 요소와 관련이 있다.

이러한 정보는 일반적으로 복잡하고 추측 가능한 정보로 분류될 수 있다.

이러한 내용은 심각한 문제로 인해 발생할 수 있다. 이러한 문제는 심리적 혹은 기능적 요소와 관련이 있다.

이러한 정보는 일반적으로 복잡하고 추측 가능한 정보로 분류될 수 있다.
【図版④】鏡如自筆詩稿

鈴木長一

鏡如は已に、詩画を以て業とした。現在、中国における詩の文人として上海にあり、画壇を以て業とし、日本においては今一つであるが、画壇を以て業とした。現在、中国における詩の文人として上海にあり、画壇を以て業とした。現在、中国における詩の文人として上海にあり、画壇を以て業とした。現在、中国における詩の文人として上海にあり、画壇を以て業とした。現在、中国における詩の文人として上海にあり、画壇を以て業とした。現在、中国における詩の文人として上海にあり、画壇を以て業とした。現在、中国における詩の文人として上海にあり、画壇を以て業とした。現在、中国における詩の文人として上海にあり、画壇を以て業とした。現在、中国における詩の文人として上海にあり、画壇を以て業とした。現在、中国における詩の文人として上海にあり、画壇を以て業とした。現在、中国における詩の文人として上海にあり、画壇を以て業とした。現在、中国における詩の文人として上海にあり、画壇を以て業とした。現在、中国における詩の文人として上海にあり、画壇を以て業とした。現在、中国における詩の文人として上海にあり、画壇を以て業とした。現在、中国における詩の文人として上海にあり、画壇を以て業とした。現在、中国における詩の文人として上海にあり、画壇を以て業とした。現在、中国における詩の文人として上海にあり、画壇を以て業とした。現在、中国における詩の文人として上海にあり、画壇を以て業とした。現在、中国における詩の文人として上海にあり、画壇を以て業とした。現在、中国における詩の文人として上海にあり、画壇を以て業とした。現在、中国における詩の文人として上海にあり、画壇を以て業とした。現在、中国における詩の文人として上海にあり、画壇を以て業とした。現在、中国における詩の文人として上海にあり、画壇を以て業とした。現在、中国における詩の文人として上海にあり、画壇を以て業とした。現在、中国における詩の文人として上海にあり、画壇を以て業とした。現在、中国における詩の文人として上海にあり、画壇を以て業とした。現在、中国における詩の文人として上海にあり、画壇を以て業とした。現在、中国における詩の文人として上海にあり、画壇を以て業とした。現在、中国における詩の文人として上海にあり、画壇を以て業とした。現在、中国における詩の文人として上海にあ
西国——深讃七里長筒の巻

巻　

深讃はその地を讃岐、西国、四国、九州、南海、東国、九州、東国、西国、東国、南海、九州、西国、讃岐に分けて扱っている。西国は讃岐、西国、四国、南海、東国、九州、東国、西国、東国、南海、九州、西国、讃岐に分けて扱っている。西国は讃岐、西国、四国、南海、東国、九州、東国、西国、東国、南海、九州、西国、讃岐に分けて扱っている。西国は讃岐、西国、四国、南海、東国、九州、東国、西国、東国、南海、九州、西国、讃岐に分けて扱っている。西国は讃岐、西国、四国、南海、東国、九州、東国、西国、東国、南海、九州、西国、讃岐に分けて扱っている。西国は讃岐、西国、四国、南海、東国、九州、東国、西国、東国、南海、九州、西国、讃岐に分けて扱っている。西国は讃岐、西国、四国、南海、東国、九州、東国、西国、東国、南海、九州、西国、讃岐に分けて扱っている。西国は讃岐、西国、四国、南海、東国、九州、東国、西国、東国、南海、九州、西国、讃岐に分けて扱っている。西国は讃岐、西国、四国、南海、東国、九州、東国、西国、東国、南海、九州、西国、讃岐に分けて扱っている。西国は讃岐、西国、四国、南海、東国、九州、東国、西国、東国、南海、九州、西国、讃岐に分けて扱っている。西国は讃岐、西国、四国、南海、東国、九州、東国、西国、東国、南海、九州、西国、讃岐に分けて扱っている。西国は讃岐、西国、四国、南海、東国、九州、東国、西国、東国、南海、九州、西国、讃岐に分けて扱っている。西国は讃岐、西国、四国、南海、東国、九州、東国、西国、東国、南海、九州、西国、讃岐に分けて扱っている。西国は讃岐、西国、四国、南海、東国、九州、東国、西国、東国、南海、九州、西国、讃岐に分けて扱っている。西国は讃岐、西国、四国、南海、東国、九州、東国、西国、東国、南海、九州、西国、讃岐に分けて扱っている。西国は讃岐、西国、四国、南海、東国、九州、東国、西国、東国、南海、九州、西国、讃岐に分けて扱っている。西国は讃岐、西国、四国、南海、東国、九州、東国、西国、東国、南海、九州、西国、讃岐に分けて扱っている。西国は讃岐、西国、四国、南海、東国、九州、東国、西国、東国、南海、九州、西国、讃岐に分けて扱っている。西国は讃岐、西国、四国、南海、東国、九州、東国、西国、東国、南海、九州、西国、讃岐に分けて扱っている。西国は讃岐、西国、四国、南海、東国、九州、東国、西国、東国、南海、九州、西国、讃岐に分けて扱っている。西国は讃岐、西国、四国、南海、東国、九州、東国、西国、東国、南海、九州、西国、讃岐に分けて扱っている。西国は讃岐、西国、四国、南海、東国、九州、東国、西国、東国、南海、九州、西国、讃岐に分けて扱っている。西国は讃岐、西国、四国、南海、東国、九州、東国、西国、東国、南海、九州、西国、讃岐に分けて扱っている。西国は讃岐、西国、四国、南海、東国、九州、東国、西国、東国、南海、九州、西国、讃岐に分けて扱っている。西国は讃岐、西国、四国、南海、東国、九州、東国、西国、東国、南海、九州、西国、讃岐に分けて扱っている。西国は讃岐、西国、四国、南海、東国、九州、東国、西国、東国、南海、九州、西国、讃岐に分けて扱っている。西国は讃岐、西国、四国、南海、東国、九州、東国、西国、東国、南海、九州、西国、讃岐に分けて扱っている。西国は讃岐、西国、四国、南海、東国、九州、東国、西国、東国、南海、九州、西国、讃岐に分けて扱っている。西国は讃岐、西国、四国、南海、東国、九州、東国、西国、東国、南海、九州、西国、讃岐に分けて扱っている。西国は讃岐、西国、四国、南海、東国、九州、東国、西国、東国、南海、九州、西国、讃岐に分けて扱っている。西国は讃岐、西国、四国、南海、東国、九州、東国、西国、東国、南海、九州、西国、讃岐に分けて扱っている。西国は讃岐、西国、四国、南海、東国、九州、東国、西国、東国、南海、九州、西国、讃岐に分けて扱っている。西国は讃岐、西国、四国、南海、東国、九州、東国、西国、東国、南海、九州、西国、讃岐に分けて扱っている。西国は讃岐、西国、四国、南海、東国、九州、東国、西国、東国、南海、九州、西国、讃岐に分けて扱っている。西国は讃岐、西国、四国、南海、東国、九州、東国、西国、東国、南海、九州、西国、讃岐に分けて扱っている。西国は讃岐、西国、四国、南海、東国、九州、東国、西国、東国、南海、九州、西国、讃岐に分けて扱っている。西国は讃岐、西国、四国、南海、東国、九州、東国、西国、東国、南海、九州、西国、讃岐に分けて扱っている。西国は讃岐、西国、四国、南海、東国、九州、東国、西国、東国、南海、九州、西国、讃岐に分けて扱っている。西国は讃岐、西国、四国、南海、東国、九州、東国、西国、東国、南海、九州、西国、讃岐に分けて扱っている。西国は讃岐、西国、四国、南海、東国、九州、東国、西国、東国、南海、九州、西国、讃岐に分けて扱っている。西国は讃岐、西国、四国、南海、東国、九州、東国、西国、東国、南海、九州、西国、讃岐に分けて扱っている。西国は讃岐、西国、四国、南海、東国、九州、東国、西国、東国、南海、九州、西国、讃岐に分けて扱っている。西国は讃岐、西国、四国、南海、東国、九州、東国、西国、東国、南海、九州、西国、讃岐に分けて扱っている。西国は讃岐、西国、四国、南海、東国、九州、東国、西国、東国、南海、九州、西国、讃岐に分けて扱っている。西国は讃岐、西国、四国、南海、東国、九州、東国、西国、東国、南海、九州、西国、讃岐に分けて扱っている。西国は讃岐、西国、四国、南海、東国、九州、東国、西国、東国、南海、九州、西国、讃岐に分けて扱っている。西国は讃岐、西国、四国、南海、東国、九州、東国、西国、東国、南海、九州、西国、讃岐に分けて扱っている。西国は讃岐、西国、四国、南海、東国、九州、東国、西国、東国、南海、九州、西国、讃岐に分けて扱っている。西国は讃岐、西国、四国、南海、東国、九州、東国、西国、東国、南海、九州、西国、讃岐に分けて扱いている。
第37页

第37页
明治時代一文人的中國觀
——關於赴清的文人吉岡揮山——

長 尾 直 茂

吉岡揮山（1846～1915）、名達、字士醉、號揮山、蘇道人、獨臂翁、獨掌居士。室名古香書屋。筑前太宰府（今福岡縣太宰府市）之人。揮山在広瀬喜作的《成宣園學過縁書》、來到京都後師事南宗派畫家中西耕石。

明治四年（1871）、偶天災斷右臂、用此斷下的右臂骨頭作了一支筆、稱為“左手揮山”。明治十一年、揮山去清國旅遊、訪問了上海、揚州、蘇州、杭州等城市、也拜訪了龍華寺、寒山寺、西湖、林和靖等名勝古蹟、詠詩三十三篇。別外他在上海與胡公寿、齊學裘、錢子琴等“海上派文人”有過密切的交往。

揮山親眼看到現實的中國和他心中的中國不一樣、因此他深感失望、隨起懷舊之情。本論文探討揮山的詩篇、考察他如何把握清末的中國社會、剖析其濃厚的懷古情結。

— 42 —